

「帰国生クラス」に対する帰国生の意識の分析

—受け入れ形態による差異に着目して—

岡村 郁子

要 旨

本研究では、帰国生受け入れ形態の一つである「帰国生クラス」に対する帰国生の意識の分析を通して、その存在意義や問題点を明らかにすることを旨とし、帰国中学生 387 名を対象とした質問紙調査を基に分析を行った。研究 1 では、「帰国生クラス」に対する肯定度を、①帰国生クラス②一般混入クラス③段階的混入クラスの受け入れ形態別に統計的に分析した結果、帰国生クラスでは肯定度が高く、一般混入クラスでは低い傾向が有意に示された。研究 2 では、受け入れクラスに対する自由記述内容を分析した結果、帰国生クラス在籍者では、「気楽で楽しい」雰囲気の中で「帰国生としてのありのままの自分」を發揮して「多様な個性と価値観」を認め合う一方「閉鎖性」「緊張感のなさ」「学習内容への不満」などの問題があること、一般混入クラス在籍者では、帰国生クラスを否定的に捉えつつも、一般クラス内では様々な困難を抱えていることが明らかになった。

【キーワード】 帰国生教育、帰国生クラス、帰国生受け入れ形態、潜在的カリキュラム

1. 研究背景

1.1 帰国生受け入れの概要

学齢期の子どもを伴う海外生活から帰国した際、まず直面するのは学校選択の問題であろう。帰国子女教育振興財団が実施している海外赴任家族を対象にした相談記録によれば、帰国後の教育や進路に関する相談は常に多く寄せられており、学齢が上がるにつれてそのウエイトを増しているという(佐藤他 2011)。帰国後の学校への適応は、その後の日本での社会生活にも大きな影響を与えることになるため、それぞれのニーズに合った学校を選ぶことは帰国生にとって非常に重要である。また、そのためには、帰国生の受け入れ形態とそれぞれの特徴を明らかに示すことが必要である¹⁾。

文部科学省による帰国生受け入れの歴史は、1965年に国立大学附属学校に帰国子女教育学級等が設置されたところに遡る。それまで私立学校にしか受け入れ窓口がなかった帰国生は「救済の対象」として認識されるようになり、1967年には帰国子女教育研究協力校等が指定され、公・私立学校における受け入れ体制の充実が図られた(江渕 1988、佐藤他 1991)。さらに日本経済の国際化に伴う帰国児童生徒数の急激な増加を受けて 1976年には「海外子女教育推進の基本的施策に関する研究協議会」が

発足し、その提言により、帰国子女教育は学校教育において国家として取り組むべき重要な課題とされた。1983年には全国各地に帰国子女教育受入推進地域が指定され、以降、増加を続ける帰国生の受け入れに取り組んできた²⁾(佐藤 1995、小島 1997)。

ところが、2001年にはこれらの指定が解除され、「教育の国際化推進地域(全国23地域)」として発展的に再統合された。この政策は実質上、帰国生教育に対する国からの援助の打ち切りを意味しており、1967年度から2000年度までの間、文部省(当時)の指定を受けて帰国子女教育研究に取り組んできた全国の協力校は、それ以降、帰国児童生徒に対する教員加配等の予算を受けることができなくなった。

一方、2006年度に文部科学省により実施された「帰国・外国人児童生徒教育支援体制モデル事業」は、翌2007年度に「帰国・外国人児童生徒受入促進事業」として引き継がれ、全国29地域がその指定を受けた。ただし、文部科学省の「海外子女教育、帰国・外国人児童生徒教育等に関するホームページ CLARINETへようこそ」に公開されているこれら指定地域からの事業報告書を見ると、この事業は名目上帰国生と外国人児童生徒の双方を対象としてはいるものの、実際は外国人児童生徒への対応を主眼とするものであることがわかる。1990年の入国管理法

改正以来、外国人児童生徒数は増加の一途をたどっており³、日本語指導や学校生活指導の必要性においても緊急度が高いことから、指導や研究の中心はおのずと外国人児童生徒にシフトしているのである。

2004年に開かれた「初等中等教育における国際教育推進検討会」においては、文部科学省に対し、いまだ問題は解決されていないにもかかわらず「帰国生教育は終わった」という見方が広がりつつあることへの懸念が示された。一連の政策転換の流れの中で帰国生に関わる問題が相対的に見えにくくなっている(佐藤他 2011)ことは危惧すべきであろう。

1.2 帰国生の受け入れ形態

現在、帰国生の受け入れには、①「帰国生クラス」「国際学級」などと呼ばれる帰国生のみを集めたクラスへの受け入れ、②一般児童生徒と同じクラスへの「一般混入」、③最初は帰国生クラスへ受け入れて翌年から一般クラスへ混入する「段階的混入」、の3つの形態がある。これらのうち、①と③は国・私立校、②はすべての公立校と一部の国・私立校でみられる形態である。①の帰国生クラスの規模は学校により異なるが、国立の場合10名前後、私立では40名に上るところもある。

②の一般混入の場合、国立校では「取り出し授業」「入り込み授業」⁴や、放課後や土曜日を利用した補習などの特別な措置が取られている。私立校での受け入れ形態は様々で、海外生活で獲得した語学力などの維持・伸長ないしはそれらを活かした帰国枠受験で大学進学率の上昇を目指す学校や、日本語力が不十分で日本の学校での学習に不安がある生徒への補習を主眼とする学校など、帰国生個人個人のニーズに合わせて学校を選択することが可能である一方で、帰国生受け入れに特別な対応のない学校もある。公立校の場合、「帰国・外国人児童生徒受入促進事業」の指定地域外では、帰国生受け入れに何の配慮もない一般の公立学校に通わざるを得ない。

2008年度現在、本研究の対象である帰国中学生では63.0%が公立学校に在籍しており⁵、帰国生クラスが設置されている国立校に受け入れられている帰国生は全体の5.5%に過ぎない。31.5%は私立校に在籍しているが、海外子女教育振興財団が毎年発行している「帰国子女のための学校便覧」(2010)によると、帰国生クラスを設置する私立中学校は、現在わずか2校である。

このように、現在、帰国生クラスに受け入れら

れる帰国生は一部に過ぎず、多くの帰国生が、何の措置も取られないまま一般クラスに混入されている。加えて、一部の私立学校では従来設置していた帰国生クラスを廃止して、一般混入クラスに帰国生を受け入れる動きもみられている(海外子女教育振興財団 2007,2010)。果たして、帰国生クラスの役割は終わったとみなしてよいのだろうか。また、それぞれの受け入れクラスではどのような問題が起こっているのだろうか。帰国生自身の受け入れクラスに対する生の声を聞き、そこで何が起き、何が求められているのかを把握する必要がある。

1.3 「帰国生クラス」に関する先行研究

帰国生教育に関する研究は「適応」という観点から個人の問題に焦点を当てたものが多く、帰国生教育を「受け入れ側の問題」と捉える視点に立つ研究は少ない。特に、受け入れ形態やカリキュラム・授業改善等の側面からの研究は希少である。受け入れ側である学校自体がまとめた、お茶の水女子大学附属中学校「帰国生はこうして学ぶ—在外学習歴を生かした学習指導のあり方」(1998)や東京学芸大学附属大泉中学校「帰国子女と一般生の相互交流を柱とした帰国子女教育の方法」(1993)なども、生徒の帰国後の日本での生活への適応や外国生活による人格形成や進路選択への影響を問うような調査や実践報告の域を出ていない。

こうした中で岡村・加賀美(2006)では、「帰国生クラス」に対する生の声を聞くために、帰国生クラスに在籍する中学生へのインタビューとフィールドワークを行った。その結果、彼らは帰国生クラスに「居心地の良さ」を感じながらも、「ぬるま湯的緊張感のなさ」や「閉鎖性」を感じて閉塞感に陥っていることが示唆された。ただし、この研究は少人数に対するインタビューデータに基づく質的分析によるもので、帰国生クラスに対する帰国生の意識を一般化できるものではなく、さらに量的な検証が必要であった。

これを受けて、岡村(2008)は帰国中学生382名を対象に質問紙調査を行い、帰国生の「受け入れクラスに対する意識」を抽出し、受け入れ形態や属性による帰国生クラスに対する意識の差異を分析した。その結果、特に一般混入クラスにおいて、「日本語運用力」因子が、「友達との関係」・「楽しさ」・「居心地のよさ」・「積極的参加」・「自由な自己表現」・「先生・友達からの認証」という5つのクラス意識因子と有意に相関をもっていることが明らかになった。

すなわち、一般混入クラスに在籍する日本語運用力の低い生徒は全般的にクラス内での意識が低く、学校生活を楽しめていないことが示された。これに対し、帰国生クラスを経て一般混入された「段階的混入クラス」に属する帰国生は、日本語力の不自由をまったく意識することなく一般クラスで居心地良く過ごすことができていたことから、帰国生クラスの存在意義が示される結果となった。

2. 研究目的と課題

本研究では、帰国生受け入れの意義と課題についてさらなる検証を行うことを目的とし、帰国生自身の「帰国生クラス」に対する肯定度と意識について調査を行った。また、その際、受け入れ形態による差異に着目して分析を行うことにより、帰国生がそれぞれの受け入れクラスで抱える問題点を明らかにし、帰国生受け入れにおける課題を併せて提示することとした。研究課題は以下の2点である。

研究1：帰国生の「帰国生クラス」に対する肯定度には受け入れ形態別でどのような差異があるか。

研究2：帰国生の「帰国生クラス」に対する意識は受け入れ形態別でどのような差異があるか。

3. 研究方法

2006年7月、都内帰国生受け入れ中学校8校(国・公・私立)に在籍する帰国生387名を対象に質問紙調査を行った。うち321名より回収し、回収率は83%であった。なお、ここで「帰国生」と呼ぶのは、原則として海外に2年以上居住し、帰国後、今回の調査対象校に受け入れられた中学生である。表1に、受け入れ形態別の属性を示す。研究1では、帰国経験を持つ中学生の「帰国生クラス」に対する肯定度を、①帰国生クラス、②一般混入クラス、③段階的混入クラス(1年次の帰国生クラスを経て2年次以降一般混入クラス)の3つの形態別に調べ、統計的に分析した。質問項目として、本調査に先立つ岡村・加賀美(2006)によるパイロットインタビュー調査より抽出された「帰国生クラスに対する肯定度」を問う5項目を用いた。各設問に対する回答の平均値を算出し、統計パッケージSPSSを用いて受け入れ形態別に分散分析を行った。

表1 受け入れ形態別 調査協力者の属性

	全体	帰国生クラス	一般混入クラス	段階的混入クラス
人数(%)	321(100%)	176(54.8%)	102(31.8%)	43(13.4%)
1. 性別	人数(%)			
男子	225(70.1%)	149(84.7%)	55(53.9%)	21(48.8%)
女子	96(29.9%)	27(15.3%)	47(46.1%)	22(51.2%)
2. 学年	人数(%)			
1年生	100(31.2%)	65(36.9%)	35(34.3%)	0(0%)
2年生	120(37.4%)	54(30.7%)	38(37.3%)	28(65.1%)
3年生	101(31.5%)	57(32.4%)	29(28.4%)	15(34.9%)
3. 帰国後の年数	人数(%)			
1年以内	93(29.0%)	49(27.8%)	35(34.3%)	9(20.9%)
1～2年以内	103(32.1%)	47(26.7%)	34(33.3%)	22(51.2%)
2～3年以内	74(23.1%)	40(22.7%)	24(23.5%)	10(23.3%)
3年より前	51(15.9%)	40(22.7%)	9(8.8%)	2(4.7%)
4. 海外での在籍校	人数(%)			
現地校	181(56.4%)	106(60.2%)	49(48.0%)	26(60.5%)
日本人学校	78(24.3%)	38(21.6%)	34(33.3%)	6(14.0%)
インターナショナルスクール	62(19.3%)	32(18.2%)	19(18.6%)	11(25.6%)
5. 在外年数合計	人数(%)			
5年未満	89(27.7%)	51(29.0%)	27(26.5%)	11(25.6%)
5年以上7年未満	96(29.9%)	52(29.5%)	31(30.4%)	13(30.2%)
7年以上10年未満	90(28.0%)	53(30.1%)	26(25.5%)	11(25.6%)
10年以上	46(14.3%)	20(11.4%)	18(17.6%)	8(18.6%)
6. 在外時の使用言語	人数(%)			
日本語中心	76(23.9%)	38(21.6%)	31(31.3%)	7(16.3%)
やや日本語中心	40(12.6%)	26(14.8%)	9(9.1%)	5(11.6%)
やや現地語中心	107(33.6%)	62(35.2%)	30(30.3%)	15(34.9%)
現地語中心	95(29.9%)	50(28.4%)	29(29.3%)	16(37.2%)

さらに、有意差の見られた項目については、どのグループ間に差が見られたかを明らかにするため多重比較を行った。

研究 2 では、同じ質問紙中の「帰国生クラスについて感じていること」についての自由記述をデータとして、KJ 法(川喜田 1967)によりコーディングおよびカテゴリー化を行い、質的な分析を行った。分析の手続きは以下のとおりである。

- 1) 自由記述の内容について、単独で意味を成すコメントを 1 単位のデータとして切片化し、カードに書き出した。
- 2) 内容の近いカードをまとめて切片群を作成し、それぞれの群の内容を表す適切なカテゴリー名を生成した。
- 3) KJ 法による分析経験のある大学院生 1 名を研究協力者として、切片群の作成およびカテゴリー名についての検証を行った。筆者と協力者との一致率は 82.5%であった。

また、研究 2 の補足として、一般混入クラス在籍帰国生を対象とした「一般クラスに混入されて困ったこと」の自由記述についても同様に KJ 法による分析を行った。これにより、研究 1 の統計的な分析だけでは見ることのできない、「一般クラス」において帰国生が抱えている困難を明らかにし、「帰国生クラス」の存在意義のさらなる検証を目指した。

なお、本質問紙では、帰国生クラスに在籍する生徒に対しては「実際に自分が在籍している帰国生クラスに対する意識」を、一般混入クラスに在籍する生徒に対しては「一般クラスから見た帰国生ク

ラスに対するイメージ」を、段階的混入クラスに属する生徒に対しては「過去に在籍した帰国生クラスに対する意識」および「現在の一般クラスから見た帰国生クラスに対するイメージ」を問うような設問を用意した。そのため、設問項目は対象者の在籍クラスにより異なるものの、①～⑤に示す同じ内容を問うことができるように設定した。以下の表 2 に、受入れ形態別の設問項目を示す。

4. 研究結果

4.1 帰国生クラスに対する肯定度

帰国生クラスに対する肯定度を受け入れ形態別に比較するため、5 つの質問項目への回答の平均値を「肯定度」として、受け入れ形態別に一元配置の分散分析を行った。その結果、帰国生クラス・一般混入クラス・段階的混入クラスの間ですべて 0.1% 水準の高い有意差が認められた。さらに、多重比較の結果、帰国生クラスに対する意識を問う各項目において、次ページの表 3 に示すような差異があることが明らかになった。

まず、設問ごとに結果を見ると、設問①「日本の学校生活に慣れるのに役立つ」では、帰国生クラス(3.36：数字は肯定度の平均値、以下同様)・段階的混入クラス(3.71)、ともに一般混入クラス(2.73)よりも高い肯定度が示された。また、設問②「帰国生クラスは気楽でのびのびしている」においても同様に、帰国生クラス(3.98)および段階的混入クラス(4.00)の在籍者の方が、一般混入クラス(2.66)よりも肯定度が高いという結果であった。

表 2 帰国生クラスに対する肯定度を問う設問項目 (受け入れ形態別)

設問の内容	設問項目		
	帰国生クラス向け	一般混入クラス向け	段階的混入クラス向け
①日本の学校生活に慣れるのに役立つ	日本の学校生活に慣れるのに役立っている	日本の学校生活に慣れるのにもっと役立つだろう	日本の学校に慣れるのに役立った
②帰国生クラスは気楽でのびのびしている	帰国生クラスは気楽でのびのびしている	帰国生クラスがあればもっと気楽でのびのびできそうだ	帰国生クラスにいた時の方が気楽でのびのびしていた
③帰国生の友達付き合いやすい	帰国生クラスの友達付き合いやすい	帰国生しかないクラスはつきあいにくそうだ <逆転項目>	今でも帰国生クラスの友達の方が付き合いやすい
④帰国生クラスに入りたい	一般クラスに移りたいと思うことがある <逆転項目>	帰国生クラスに入りたいと思う	もとの帰国生クラスに戻りたいと思うことがある
⑤帰国生クラスは楽しい	帰国生クラスより一般クラスの方が楽しい <逆転項目>	帰国生クラスより一般クラスの方が楽しいと思う <逆転項目>	帰国生クラスより今の一般クラスの方が楽しい <逆転項目>

表3 受け入れ形態別 帰国クラス肯定度の分散分析 () = 標準偏差

	I 帰国生クラス (N=174)	II 一般混入ク ラス(N=100)	III 段階的混 入クラス (N=42)	F 値	多重比較
①日本の学校生活に慣れるのに役立つ	3.36 (1.08)	2.73 (1.17)	3.71 (1.29)	14.1***	I (3.36) > II (2.73) *** III (3.71) > II (2.73) ***
②帰国生クラスは気楽でのびのびしている	3.98 (1.08)	2.66 (1.28)	4.00 (1.19)	44.0***	I (3.98) > II (2.66) *** III (4.00) > II (2.66) ***
③帰国生の友人は付き合いやすい	3.94 (1.05)	2.83 (1.25)	3.45 (1.33)	29.6***	I (3.94) > II (2.83) *** III (3.45) > II (2.83) *
④帰国生クラスに入りたい	3.74 (1.22)	2.58 (1.26)	3.13 (1.44)	27.3***	I (3.74) > II (2.58) *** I (3.74) > III (3.13) *
⑤帰国生クラスは楽しい	3.82 (1.10)	2.19 (1.09)	2.71 (1.31)	70.9***	I (3.82) > II (2.19) *** I (3.82) > III (2.71) *** III (2.71) > II (2.19) *

なお、これら 2 問においては、段階的混入クラスの得点が帰国生クラスの得点を上回っていた。すなわち、帰国生クラスを出て一般クラスに混入されてからの方が、帰国生クラスに対する肯定度がより高いことが示されたといえる。

設問③「帰国生の友人はつきあいやすい」においても設問①および②と同様、帰国生クラス(3.94)・段階的混入クラス(3.45)ともに、一般混入クラスの肯定度(2.83)を上回った。設問④「帰国生クラスに入りたい」では、帰国生クラスの肯定度(3.74)が、一般混入クラス(2.58)および段階的混入クラス(3.13)よりも有意に高いことが示された。設問⑤の「帰国生クラスは楽しい」については、3 つの形態すべてで有意差がみられ、帰国生クラス(3.82)、段階的混入クラス(2.71)、一般混入クラス(2.19)の順に、有意に肯定度が高かった。また、設問④および⑤では段階的混入クラスにおける肯定度が帰国生クラスのそれを有意に下回っていた。

以上の結果から、帰国生クラスに対する受け入れ形態別の肯定度の差異をまとめる。まず、すべての設問項目において、帰国生クラス在籍者は一般混入クラス在籍者より有意に肯定度が高いことが明らかになった。これに対して一般混入クラス在籍者では肯定度が低い傾向が有意に見られ、帰国生クラスに対して全体的に否定的なイメージをもっていることが示された。一方、段階的混入クラス在籍者は、設問 4 を除くすべての項目で一般混入クラス在籍者よりも有意に肯定度が高かった。なお、設問④⑤においては帰国生クラス在籍者の肯定度が段階的混入クラス在籍者を有意に上回っていた。すなわち、既に帰国生クラスを卒業して一般混入クラスに移った帰

国生は、「帰国生クラスに入りたい(戻りたい)」「帰国生クラスは楽しい(楽しかった)」という意識が、今現在帰国生クラスに在籍する者ほど高くないことが示されたといえる。

4.2 帰国生の受け入れクラスに対する意識と受け入れ形態別の差異

研究 2 では、調査対象者による自由記述の内容をデータとして「帰国生クラス」に対する意識を抽出し、受け入れ形態別に分析した。その結果、表 4 に示すような帰国生クラスに対する意識が明らかになった。なお自由記述への回答者数は帰国生クラス 176 名中 52 名、一般混入クラス 102 名中 62 名、段階的混入クラス 43 名中 36 名、有効コメントはそれぞれ 50 単位、68 単位、30 単位であった。

以下に、受け入れ形態別の分析結果を述べる。

4.2.1 帰国生クラス在籍者

帰国生クラス在籍者では、「帰国生としてありのままの自分(9 : 数字は単位数、以下同じ)と「友人関係のよさ(9)」、「多様な個性と価値観(6)」、「気楽な楽しさ(3)」などの肯定的なコメントが合計 32 単位で、全体の 64% を占めた。否定的なコメントとしては「学習内容への不満・不安(4)」「緊張感のなさ(2)」「閉鎖性(1)」などが挙げられた。また「クラスメートに対する評価」として肯定(5)・否定(10)それぞれのコメントを得た。

4.2.2 一般混入クラス在籍者

この形態でいう「帰国生クラスに対する意識」は、「外から見た帰国生クラスに対するイメージ」である。ここでは帰国生クラス在籍者と対照的に、「一般生との乖離とコンプレックス(19)」「日本への適応の妨げ(12)」「閉鎖性(9)」「つまらなさ(4)」

「学習内容への不満・不安(2)」という否定的コメントが 71%を占め、「帰国生としてのありのままの自分(15)」、「興味と憧れ(4)」などの肯定的コメントの数を大きく上回った。帰国生クラス在籍者では「一般生との乖離とコンプレックス」を示すコメントはわずか1単位であったのに対し、一般混入クラス在籍者では全体の28%を占めている。

4.2.3 段階的混入クラス在籍者

この形態では、「帰国生としてのありのままの自

分(4)」、「友人関係のよさ(4)」などのプラス面を評価するコメントと、「閉鎖性(7)」、「学習内容への不満・不安(2)」などのマイナス面を指摘するコメントをほぼ同数みることができる。また「気楽な楽しさ(11)」を挙げる一方で「友人関係の難しさ(4)」を挙げる生徒もおり、かつて在籍した帰国生クラスを、現在在籍する一般混入クラスからみること、メリット・デメリットの双方にわたる評価がみられるのが特徴である。

表 4 「帰国生クラス」に対する意識の受け入れ形態別差異

(自由記述への回答者数：帰国生クラス=52名、一般混入クラス=62名、段階的混入クラス=36名)

カテゴリー	ラベル	帰国生クラス	一般混入	段階的混入	カテゴリー	ラベル	帰国生クラス	一般混入	段階的混入
肯定的コメント (単位数)					否定的コメント (単位数)				
帰国生としてのありのままの自分	海外経験の保持と活用	2	7		一般生との乖離とコンプレックス	一般生との交流のなさ		13	
	ありのままの自分でいられること	7	1			一般生へのコンプレックス		5	
	多様性		7			一般生からのいじめへの恐れ		1	
	海外経験の共有			3		一般生からの疎外感	1		
	個人の尊重			1	閉鎖性	少人数による限定性		5	2
友人関係のよさ	仲間意識の強さ	6	1	2		話題の限界			4
	少人数のよさ	3				束縛感	1	2	
	クラスのまとまり			1		多様性のなさ		2	
雰囲気			1	視野の狭さ					1
気楽な楽しさ	楽しさ	3		2	日本への適応の妨げ	日本文化・生活の理解の妨げ		10	
	授業での発言のし易さ			3		適応の必要性の認識		2	
	自由さ			3	クラスメートへの否定的評価				
	気楽さ			3	学習内容への不満・不安	学習レベルの低さ	2		2
多様な個性と価値観	個性的な友人の存在	4			英語が話せないことへの不満	2			
	価値観の共有	2			学習内容の不足と遅れ		2		
クラスメートへの肯定的評価					5	—	—		
興味と憧れ	楽しそう		2		友人関係の難しさ	帰国生仲間へのコンプレックス			2
	入ってみたい気持ち		2		友人関係の苦労				1
					仲の悪さ				1
					つまらなさ	つまらなさそう		4	
緊張感のなさ					緊張感のなさ	ぬるま湯的な雰囲気	1		
						緊張感の欠如	1		
違和感							2		
有効コメントの単位総数							50	68	32

表5 一般クラスに在籍する帰国生の抱える困難
(自由記述への回答者数 52名)

カテゴリー	ラベル	コメント 単位数
学習面での 困難(33)	学習レベルの高さ	22
	日本語理解の困難	4
	発言のしにくさ	4
	授業での緊張感	3
居心地の 悪さ(26)	人数の多さ	9
	友人関係の悪さ	6
	いじめ・からかい	5
	クラスの雰囲気悪さ	3
	自由のなさ	3
ありのままの 自分の 封印(8)	海外体験の封印	5
	緊張感	3
違和感・不 適応感(6)	海外生活との違いへの 戸惑い	4
	学校生活への不適応感	2
	コメント単位数総数	73

以上、「帰国生クラス」に対する帰国生の意識を見てきたが、その補足調査として、一般混入クラスに受け入れられた帰国生が、現在在籍している「一般クラス」に対して感じている困難についても分析を行った。一般混入クラス在籍者による自由記述のうち、「一般生と同じクラスに入って困ったことがあれば自由に書いてください」という設問に対する回答をデータとし、KJ法を用いてコーディングし、カテゴリー化を行った。自由記述への回答者数は一般混入クラス102名中52名、有効コメントは73単位であった。結果を上表5に示す。一般混入クラスにおいて帰国生が感じている困難でもっとも多いのは「学習面での困難(33)」、次いで「居心地の悪さ(26)」、「ありのままの自分の封印(8)」、「違和感・不適応感(6)」が挙げられ、一般クラスで多くの困難を抱えていることが示された。

以上の結果をまとめると、帰国生クラス在籍者では、「気楽で楽しい」雰囲気の中で「帰国生としてのありのままの自分」を発揮して「多様な個性と価値観」を認め合う一方、「閉鎖性」「緊張感のなさ」「学習内容への不満・不安」などの問題があること、一般混入クラス在籍者では、帰国生クラスに対する否定的なコメントが7割を占めるものの、実際のクラス内では「学習面の困難」や「居心地の悪さ」など様々な困難を抱えていること、段階的混入では、帰国生クラスに対するプラス面・マイナス面双方の評価が見られることが明らかになったといえる。

5. 考察

5.1 「帰国生クラス」に対する肯定度の受け入れ形態別差異とその要因

まず、研究1の統計的分析の結果より、帰国生クラスにおいては帰国生クラスに対する肯定度が高く、一般混入クラスにおいては低い傾向が有意に見られたことから、帰国生は現在自分の在籍しているクラスを有意に肯定的に評価していることが明らかになった。多くの学校が帰国生クラスへの受け入れの要件を帰国後2年以内と定めており、特に国立校では帰国後の適応に支援が必要である生徒を優先的に入学させる学校が多いことから、この形態に在籍する帰国生は、日本語力や日本での生活、教科学習などに何らかの不安を持っていることが推察される。こうした状況では、同じ経験を共有できる友人との気楽な少人数クラスで、教科学習の遅れにも個別に対応してもらえることが、肯定的な評価につながっていると考えられる。

一方で、一般混入クラス在籍帰国生の帰国生クラスに対する肯定度が低かった理由の一つとして、表1で示したとおり、一般混入クラスの帰国生の40%以上は在外時の使用言語が「日本語中心」「やや日本語中心」であり、海外にいても日本語の保持が十分に行われていたことが挙げられる。日本人学校に在籍していた割合も33.3%と他の受け入れ形態に比べて高く、帰国後に帰国生受け入れに配慮のある国・私立校を受験する必要のないケースが多かったと推測できる。さらに、岡村(2008)では「一般混入クラスに在籍する日本語運用力の高い生徒は、一般的にクラス内での意識が高い」ことが示されており、この結果に照らすと、日本語運用能力が高い帰国生は一般混入クラスを肯定的に受け止め、帰国生クラスに対する肯定度が低かったということができよう。しかし、日本語能力が高くないにもかかわらず帰国生クラスを受験したくても時期的に無理であった場合や、通学可能な範囲になかった者で、選択の余地なく一般混入されている帰国生の場合はこの限りではなく、次項で見ると困難を抱えることとなる。

また、段階的混入クラスの生徒については、「もとの帰国クラスに戻りたいと思うことがある」「帰国クラスより今の一般クラスの方が楽しい(逆転項目)」という二つの質問に対して、帰国生クラスに在籍する帰国生に比べて有意に肯定度が低かった。

すなわち、帰国生クラスのよさを認めながらも、一般混入クラスに入った現在では一般クラスのよさも感じていることが示唆されたといえる。この形態では、帰国直後の1年間を少人数の帰国生クラスで過ごし、十分な日本語力を獲得してから一般クラスへ混入されたため、現在在籍している一般クラスでの生活に困難が少ないこと、帰国生クラスの閉鎖性を感じていた場合は一般クラスでより広い友人関係を得たことなどが、この理由として考えられる。

5.2 「受け入れクラス」に対する意識にみる帰国生の困難

研究2で分析した自由記述の回答者数は全体の47%(表5に示す補足調査では51%)に過ぎず、本調査対象となった帰国生全体の意識を必ずしも代表するものではない。こうした限定性はあるものの、その分析結果からは「帰国生クラス在籍者は帰国生クラスに肯定的であり、一般クラス在籍者は否定的である」と一概に断定できない状況が浮かび上がってくる。

表4に見るように、帰国生クラスの帰国生は「友人関係の良さ」や「多様な個性や価値観」、「気楽な楽しさ」について多く言及しており、そうしたクラスの雰囲気の良いが「ありのままの自分」を発揮することにつながっていると考えられるが、一方で、「閉鎖性」「緊張感のなさ」や「クラスメートに対する否定的評価」「学習内容への不満」という悩みを抱えていることも示された。少人数編成で同じ背景を持った生徒が集まる帰国生クラスは、安心感がある一方で、必然的に閉塞感も生じ、肯定的な意識と否定的な意識が混在している。これは、帰国生クラスの「ぬるま湯的緊張感のなさ」や「外の世界を知らない閉鎖性」を指摘した岡村・加賀美(2006)の結果を裏付けるものであるといえるだろう。

一般混入クラスの帰国生については、研究1の結果から帰国生クラスに対する肯定度は低いことがわかった。研究2の結果からも、帰国生クラスに対して「閉鎖性」「日本への適応の妨げ」「一般生との乖離とコンプレックス」「つまらなさ」という否定的なコメントが多くみられた。しかし、研究2の補足として表5に示した一般クラスにおける困難として、「学習面での困難」、「居心地の悪さ」、「ありのままの自分の封印」、「違和感・不適応感」という問題を抱えていることも同時に明らかになった。

冒頭で述べたように、2001年以来の政策の変更

により、文部科学省からは「帰国生教育は終わった」との方向付けが暗示されている。しかし、本研究により明らかになった帰国生クラスや段階的混入クラス在籍者の帰国生クラスに対する肯定的な意識や、一般混入クラスに在籍する帰国生の困難に鑑みれば、帰国生受け入れにおける帰国生クラスの役割は、まだ終わっていないと考えられる。

では、一般混入クラスに在籍する帰国生がこのような様々な困難を感じながらも、一般混入クラスを肯定的に捉えているのはなぜだろうか。ここには、内外からの日本への早期適応のプレッシャーに加え、「潜在的カリキュラム」の存在が媒介していることが考えられる。佐藤(1989)は、「潜在的カリキュラム」という概念を用いて、学校やクラスにおけるさまざまな圧力が「目に見えないカリキュラム」として帰国生に働きかけている可能性を指摘した⁶。

佐藤(1989)によれば、学校内の社会規定に限定すると、潜在的カリキュラムには以下の3つの形態があるとされている。

- ① 学校生活の中で子供同士の人間関係を通して無意識に学習されるもの
- ② 教科の学習を通して間接的に学習されるもの
- ③ 教師との関係の中で無意識に学習されるもの

帰国中学生を受け入れる一般混入クラスの場合、年齢的に友達関係が学校生活の重要な要素であることから、このうちの①が特に大きな影響をもつと考えられる。研究2の結果にみられるとおり、彼らは「一般生との交流」のない帰国生クラスを「日本への適応の妨げ」とみなして否定し、「一般生との乖離」を避けようとしている。このように自らに同化へのプレッシャーをかけ、クラスでの様々な困難にも耐えて、自分の在籍する一般クラスを肯定していることが考えられるのである。

さらに、特に一般の公立校では「教科の学習」において帰国生の学習の遅れに対する措置が取られないことが多く、表5に示されるように、回答者の約半数が「学習面での困難」を抱えながらも、一般生と同じ授業についていかなければならない。ここでも、②の「教科の学習を通して」学習される潜在的カリキュラムが作用する可能性がある。また、学習面の困難のうち「授業での緊張感」や「発言のしにくさ」は③の「教師との関係の中で」生じる部分も大きいと推測される。

6. 今後の課題

本研究の成果として、帰国生クラスの一定の存在意義を量的・質的両面より確認すると同時に、帰国生クラス、一般混入クラスそれぞれの抱える問題点を、帰国中学生の生の声を聞くことから明らかにすることができた。今後はこれらの点について教室でのフィールドワークやインタビューを含めてさらに詳しく検討し、帰国生のよりよい受け入れ形態について引き続き模索したいと考えている。

なお、研究2で取り上げた「帰国生クラスに対する意識」においては、データとなる自由記述への回答者数が対象者全体のほぼ半数に過ぎなかった点で、得られた結果の一般化には限界がある。今後も継続して質的・量的双方からの調査を行い、結果の精緻化を目指したい。さらに、今回の調査で扱わなかった一般混入クラス在籍者の「一般クラスに対する肯定的な意識」と、帰国生クラス在籍者の「一般混入クラスに対するイメージ」を明らかにし、本研究から得られた結果と比較検討することも今後の課題である。

注

1. 海外から帰国した学齢期の子どもに対する呼び方は様々であり、文部科学省においても、「学校基本調査」では「帰国子女」、「帰国生児童生徒在籍状況等実態調査」では「帰国児童生徒」という異なった呼称が用いられている。近年では、多くの学校や民間の機関が「帰国子女」から「帰国生」に呼び方を変えており、本稿でも「子女」という言葉の持つ封建的家父長制の名残を避けて「帰国生」の呼び名を用いることとした。
2. 保護者の仕事により1年以上を海外で過ごして帰国し、日本の小・中・高等学校に受け入れられた帰国児童生徒数は1992年度の13,777名をピークに減少し、2004年度には10,100名にまで落ち込んだが、2005年度より再び増加に転じ、2009年度現在では12,118名である（文部科学省「学校基本調査」による）。
3. 公立のみ的小・中・高等学校、中等教育学校及び特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒は、2003年度の19,042名に対し、2008年9月には28,575名であった（文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」（2009）による）。
4. 「取り出し授業」とは、特別な指導が必要な生徒を授業時間に別教室へ連れ出して教員や学習指導員による個別または少人数指導を行う授業方式であり、「入り込み授業」とは、学習指導員や通訳などが授業に入り、支援の必要な生徒に対して直接必要な指導を行うものである。
5. 海外子女教育財団の調査によれば、2008年度現在、全国で何らかの形で帰国生受け入れを行っている学校数は、小・中学校298校、高等学校294校、大学・短期大学414校である。学校種別在籍者数でみると、小学校では在籍者6015名中、国立126名(2.1%)・公立5631名(93.6%)・私立258名(4.3%)、中学校では在籍者2514名中、国立139名(5.5%)・公立1584名(63.0%)・私立791名(31.5%)、高等学校では在籍者1723名中、国立119名(6.9%)・公立555名(32.2%)・私立1049名(60.9%)となっている。
6. 「潜在的カリキュラム」は「ヒドゥン・カリキュラム」とも呼ばれる。この概念を初めて提唱したのはJackson(1968)であり、「教室での学級生活に適応するための暗黙のルールの発見」という文脈において、この用語が用いられている(溝上2006)。

参考文献

- 江渕一公 (1988) 「帰国子女のインパクトと日本の教育—『帰国児』をいかに教育の視点から」『社会心理学研究』3(2), 20-29.
- 岡村郁子 (2008) 「帰国生の受け入れクラスに対する意識—受け入れ形態の差異に着目して」異文化間教育学会編『異文化間教育』28, 100-113.
- 岡村郁子・加賀美常美代 (2006) 「帰国生の受け入れにおける学校コミュニティの役割—取り出し・少人数授業に関する一考察」『日本コミュニティ心理学会第9回大会論文集』59-60.
- お茶の水女子大学附属中学校 (1998) 『帰国生はこうして学ぶ—在外学習歴を生かした学習指導のあり方』第4回海外子女教育研究協議会
- 海外子女教育振興財団 (2007, 2010) 『帰国子女のための学校便覧』海外子女教育振興財団
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書
- 小島勝 (1997) 「海外・帰国子女教育の展開」江渕一公編『異文化間教育研究入門』第2章
- 佐藤郡衛 (1989) 「帰国子女の受け入れに関する社会学的研究—潜在的カリキュラム論によるアプローチ」『東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要』5, 43-62.
- 佐藤郡衛 (1995) 『転換期にたつ帰国子女教育』多賀出版
- 佐藤郡衛・稲田素子・岡村郁子・小澤理恵子・熊野孝・渋谷真樹 (2011) 『帰国児童生徒教育に関する総合的な調査研究報告書の概要』海外子女教育振興財団
- 佐藤弘毅・中西晃・小島勝・坂下英喜・佐藤郡衛・多田孝志編 (1991) 『海外子女教育史』海外子女教育振興財団
- 東京学芸大学附属大泉中学校 (1993) 『帰国子女と一般生の相互交流を柱とした帰国子女教育の方法』東京学芸大学附属大泉中学校
- 溝上慎一 (2006) 「カリキュラム概念の整理とカリキュラムを見る視点—アクティブ・ラーニングの検討に向けて—」『京都大学高等教育研究』12, 153-162.
- 文部科学省 学校基本調査 (2004・2005・2006・2008・

2010)

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/1267995.htm

文部科学省 (2004) 『第 2 回初等中等教育における国際教育推進検討会資料』

文部科学省 (2009) 「帰国・外国人児童生徒受入促進事業に係る報告書の概要」海外子女教育、帰国・外国人児童生徒教育等に関するホームページ「CLARINET へ

ようこそ」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/001.htm

文部科学省 (2009) 『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査』

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1309275.htm

Jackson, P.W. (1968) *Life in classroom* : Holt, Rinehart and Winston.

おかむら いくこ／お茶の水女子大学グローバル教育センター

okamura1231@aol.com

Analysis of Awareness of Returnee Students about 'Returnee Class': With Focus on the Difference Due to Reception Formation

OKAMURA Ikuko

Abstract

Returnees, children who return to Japan after living abroad, face the problem of reassimilation into Japanese schools, and Japanese schools face difficulties in finding the best methods of accommodating these students. The present study investigates the effects and problems of special classes for returnees, and returnees' attitudes towards them, and makes suggestions for improvement. Based on questionnaire results of 387 junior high school returnees, a quantitative and qualitative analysis was made of three types of returnee classes. Study 1 contains a statistical analysis of the degree of returnees' acceptance of 1) returnee-only classes, 2) mixed classes, and 3) step-by-step mixed classes. The analysis suggests that returnees have a more positive attitude towards returnee-only classes and a more negative attitude towards mixed classes. Study 2 analyzed the attitudes of returnees towards returnee-only classes and mixed classes through free description. Some students in returnee-only classes reported that they could "behave naturally as a returnee" and had "mutual respect of each other's characters and views" in a "pleasant and easy-going atmosphere", while they complained about a "closed world", "looseness", "negative comments of classmates", and "poor contents in their studies." Returnees in mixed classes reported that they made an effort to hide their foreign experiences and adjust themselves to Japanese practices and requirements, while suffering from "difficulty in self-adjustment," the "high level of classes," and "too many classmates."

【Keywords】 the education of returnee students, reception formation of returnee students, returnee classes, the hidden curriculum

(Global Education Center, Ochanomizu University)